

全国初ろうあ運動の事務所 神戸ろうあハウス

全国手話通訳問題研究会事務所 村井義忠

みなさん、こんばんは。只今ご紹介をいただきました村井と申します。よろしくお願ひします。

第11回日本聾史学会のこれまでの内容は深いものがあり、積み上げられてきたものがあると思いますが、健聴者が講演をする例は少ないのではないかと思います。私は健聴者です。手話でお話をしますが、みなさんにとって何か抵抗があるかも知れませんがご辛抱いただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

いつだったか忘れましたが、先日私は三ノ宮で4人の方とお会いしました。この大会の実行委員長を担当されている山田さん、事務局担当の廣川さん、そして若生さん、井筒さんの4人の方とお会いして話し合ったときに、この学会の講師について相談があると持ちかけられました。内容をお聞きすると「神戸に全国初のろうあハウス、ろうあ者の事務所のようなものが出来た。」その歴史についてお話をしてほしいと思ひ、今日こうして会っていると言われ、私は大変驚きました。私は健聴者です、このろうあハウスが出来た頃を振り返りますと、昭和24年か、25年あたりで、私はまだ幼少の頃のことでし、経験もないし記憶もないし、と言ったようなやりとりで始まりました。

相談していくなかで、このお話について考えてみたとき「年配で80歳代あたりの方なら、ろうあハウス設立時についていろいろ深く知っているはずだと思うのでお名前を何人かお伝えしました。」そのときのお返事は、ご高齢でお話をするだけの体力もないしといったやりとりもあって、最終的結論として、私が幼少の頃に経験したものでいいから話をしてほしいという内容で確認されましたが、十分内容のあるお話ができるかどうか不安もありますが、そのあたりを頭に入れて話を聞いてほしいと思ひます。

今日講演する内容についての資料は2つあります。1つはこちらの記念誌です。「神戸ろうあ協会創立60周年記念誌。」この資料から抜粋してパワーポイントを作成しました。2つ目の資料はこちらの本です。「兵庫手話通訳の足跡。」この2つ

の資料の中から選り出し、今日のための資料を作りました。この神戸ろうあ協会の記念誌は販売されていません。在庫がなくなっています。

ですから神戸ろうあ協会の会員で高齢者の方々がそれぞれ大事に、大事にお持ちの方が居られると思ひます。一般には販売されていない貴重な資料です。こちらの「兵庫手話通訳の足跡」は、新しく作成され手話通訳者について、具体的に兵庫の歴史が綴られています。この本は今日、書籍売り場のところで販売しています。1冊700円です。1000円支払えば300円お釣りがもらえますので、ぜひ、1000円支払って300円のお釣りと一緒に本を買ってください。(会場笑)ぜひ買ってください。よろしくお願ひします。



まず、戦前のお話については、午後からの大矢さんの講演された内容と同じだろうと思ひますが、今から102年前のお話ですので、私は生まれていないし、みなさんも生まれておられないと思ひます。その頃、ろうあ者が東京に集まって会議を開きました。おそらくろう学校を卒業された若い人たちが中心に、団体が必要だと思ひて集まり相談が始まったように思ひます。どなたかそのとき元気に参加された方おられますか、いないですよ、当然ですよ。

大正2年に東京で聾哑クラブが設立されました。ろうあ者にはやはり集団が必要だと強く思ひ、集まって自分たちのいろいろな悩みを吐き出すことができる場を作りたい、そのために立ち上げることを目指して相談され、作られたのが大正2年、ろうあ者自らが集まって相談できる場をもうけたのだろうと私は想像します。私はこのときもまだ生まれていませんが、次々と総会が開かれていき

ます。その中で自分たちのいろいろな歴史を新しく作り、積み上げていくために総会が開かれたのだらうと思います。

先ほど大正5年に東京で総会が開かれ、回を重ねる中で大正10年、東京で開かれている総会を真似して神戸で、「神戸ローアクラブ」を結成。大正10年といえば、今から87年前ですから87歳の方がいれば、このときに生まれていたことになりますね。お昼からの講演で最後のほうで、91歳のおじいさんが舞台上がってお話をされましたね。あの方ならご存知だらうと思います。「神戸ローアクラブ」の名称でスタートし、後に現在の神戸ろうあ協会の名称に変更されますが、それ以前は「神戸ローアクラブ」という名称で大正10年にスタートしています。

7時50分までに終わって下さいと言われました。

でも、考えてみれば私の後に吉川さんのお話があります。吉川さんのお話時間が短くなります。先ほど控え室で相談をしまして、私の話と吉川さんの話は同じ時間であるほうがいいということになりましたので、少し短くなるかもしれませんが、ご了解下さい。

大正10年に「神戸ローアクラブ」ができて、初代会長、松谷寅吉氏、旧私立神戸ろうあ学校校長。岩本氏・妹尾氏・佐藤氏・田中氏、この方々が敗戦を迎えるまでの間校長を歴代受け継がれてきた方のお名前です。6代目の会長は広畑氏です。写真見えますか？見にくいですか？2列目に写っている男性が私の父です。それから女性3人が並んで写っていますね、その左端に写っているのが私の母です。昭和14年の写真ですので、まだ結婚前ですね。(会場爆笑、拍手)結婚前「ローアクラブ」の役員をしていて、棒を持ってきてくれました、ありがとうございます。これが父で、これが母です。(会場笑)役員同士、活動する中でいろいろ話し合ったりしているうちに恋が芽生えたんだらうと思います。この男性、見えないですか、この男性(笑い)が広畑さんです。あだ名は、日本聾史学会初代会長の伊藤政雄さん、そちらに居られますが、あだ名の手話はこうしますね、右手を体の横で回します。そうですね。広畑さんのあだ名も同じように表現します。(会場笑)

私が幼少の頃、広畑さんの正式な名前と呼ぶと

いうことはなく、あだ名の手話で広畑さん、広畑さんちょっと、ちょっとと呼んでいました。大きくなってから伊藤先生にお会いしたとき、あだ名が広畑さんのあだ名と同じだと思いました。写真に写っているの方が広畑さんなんです。昭和14年に発足し、次に昭和16年、神戸に続いて兵庫県の中の姫路市に「ろうあクラブ」が発足しました。おそらく考えられるのは当時、東間先生がおられ、ろう学校の先生でした。普通は東と表し、指文字のまで表現するのですが、服装からイメージした呼び名がつけました。先生の妹さんが聞こえない方だったんです。その関係もあってろう学校の先生になられて、姫路に移られ、そこで子どもたちを集め教育されました。その関係もあって、「ろうあクラブ」が結成されただらうと思います。

今日のお昼からの講演にもありましたように、戦争が段々激しくなってきます。昭和16年～20年、この間戦争がひどくなってきます。私の父も同じように尼崎に通っていました。今日お配りされている資料を買われた方も居られると思いますが、その資料の中に私の父の名前が記載されています。父は義孝、私は義忠、「たか」と「ただ」の1字違いです。父は尼崎まで勤めに行っていました。本来の仕事は洋服の仕立てを一筋やっていたのですが、戦禍も激しくなり徴用されて通うことになりました。それが尼崎で毎日通っていました。

名称が変更していくのは、戦争が激しくなってくる中で、ろうあ部・クラブという名前はなくなっていきます。教育関係の名前に変更、統廃合されていきます。兵庫県も同じように変更され、「聾啞教育福祉協会」となります。戦争末期を迎えるころになると、戦争を賛美し応援するために1つの大きな集団が作られます。それが「大政翼賛会」です。そのためにろうあ者の集団や部会はつぶされ解散させられてしまうというような悲しい歴史を体験することになりました。

私が生まれたのは昭和18年、戦争が激しくなってきた頃です。本土に敵機がやってくる爆弾が投下されるようになってきました。私が生まれたところは神戸の六甲道で生まれました。今は高架になっていますが、昔は路面で走っていました。その六甲道駅近くの普通の民家の2階を間借りして

いました。そのときの様子を母から聞きますと、私が生まれて引っ越すまで1年間、ここで暮らすわけですが、戦禍も激しくなってきたのを心配して、母の実家が明石にあります。明石に引っ越しをするまでの1年間、六甲道で体験した中で、母の話によると、当時私が「通訳」をしたと言っています。

考えてみるとまさか0歳か1歳の頃に「通訳」をしたとは考えられない。でも何をしたかといえ、当時敵機来襲時、空襲警報が鳴り、その音を赤ちゃんであった私が聞いて、目で知らせたのか、何かの動きで知らせたのかどうかは知りませんが、母は赤子の様子を見て空襲警報が鳴っていることを知ったということと、先ほども言いましたが、民家の2階を間借りしていたこともあって、お客さんが来て1階の玄関にいても、2階にいる母は気がつきません。そこで来たことをどうやって伝えるか、階段を叩いて伝わらなければそのまま階段を上がって来て、いきなり顔を合わせて驚くというような状態でした。父は何を考えたのか私には分かりませんが、仕事を終えて帰ってきたとき、空き缶を3つ持って帰り、3つの空き缶に穴をあけそこに紐を通して、天井に吊しその紐を窓から1階の玄関横まで下ろし、1階のところに「2階に用事のある方はこの紐を引っ張ってください」そうすると空き缶3つがぶつかりあって音が出ます。当時1歳ぐらいの赤ちゃんだった私がおその音を聞いて母に伝えたというような話を母から聞かされますが、それが本当だったかどうかは分かりませんが、小さいときに「通訳」をしたという話を聞かされたことがあります。それが昭和18年、戦争が激しくなってきた頃のことです。

母の実家である明石に引っ越しをしました。その後、神戸は大空襲にあい何もかもなくなり焼け野原となってしまいます。父は仕事を終えて帰って見るも、辺り一帯は焼け野原。その当時、国鉄もストップしてしまい動きません。ですから尼崎から歩いて六甲道まで帰ってきますが、周りには何もありません。仕方がないので、また歩いて明石まで帰ってきたというような話も聞かされました。

普段家の中でのコミュニケーションは2通りあります。1つは父が居るときは口話はありません。

父は口を閉じたまま手話を使います。ですから3人でのコミュニケーションは手話で行います。父が出かけて居ないとき、母とのコミュニケーションは口話でやり取りをします。ですからこの2つの方法でやってきました。

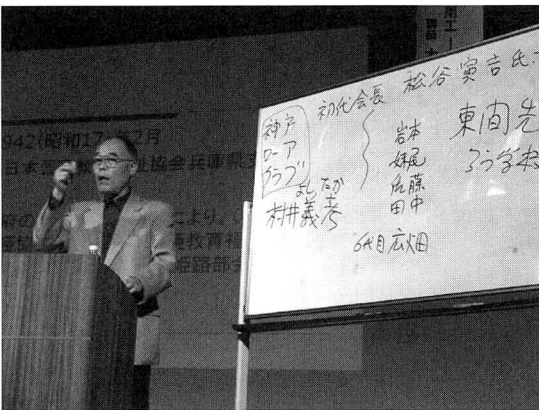
先ほどお話ししました、昭和20年8月敗戦を迎えたとき正式に「日本聾啞教育福祉協会」は解散となります。その後、昭和22年に、全日本ろうあ連盟結成のための準備委員会が開かれます。でもその少し前に広畑さんから提案されました。これまではどちらかといえば健聴者に迎合し、指導を受けるろうあ者集団であったけれども、これまでのことはおいといて、今後のろうあ者集団は、やはりろうあ者を中心にやっていくことが必要だという考え方が発案され、「ろうあ者のためのローアクラブが要る」という考え方が発表されました。昭和21年に正式に神戸部会、以前あった名称をそのまま持ってきて、「神戸ローアクラブ」という名称で正式に立ち上げスタートします。そのときの委員長は広畑さんです。私の父は何をやったかといいますが、会計を担当するようになりました。

「神戸ローアクラブ」が結成され、目的は2つありました。1つは毎月定期的に全会員を対象にした集まりを必ず開催する。それが1つ。2つ目は集まる場所を探したり、準備などについての会議が必要です。ですから役員会と毎月、毎月、ろうあ者が集まり何か楽しい催し物をしたり、学習を行ったりする場所の提供を約束し、それも全会員が参加することを原則にというような考え方でスタートしています。ただ、当時役員の人たちの集まる場所がないんですね。そこで喫茶店の場所を借りて会議をしますが、コーヒー1杯の注文で延々と議論をする。他のお客さんの迷惑になる、喫茶店の経営者も困る。安い料金で延々と居られて困ると嫌な顔をされます。段々その喫茶店を借りるのも遠慮がちになってきます。そこで場所を転々と変えながら、会議のできる場所を探さなければならぬという大変な状況でした。

このような状況の中で昭和22年、姫路も同じように部会が解散して、「ろうあクラブ」として再結成されました。神戸と姫路の2カ所にろうあ者が集まれる場が設けられます。「神戸ローアク

ラブ」のこれまでの歴史の中で画期的な出来事がありました。

昭和24年、役員改選があり、この9名の人たちが新しい役員として選ばれます。この中の何人かのお名前をご存知の方もこの会場に居られると思います。このメンバーで新しいローアクラブの活動がスタートします。この時、竹中さんという聞こえる女性がいます。聞こえない男性、竹中さんと結婚された方です。その後、神戸を中心に手話通訳活動を本格的に始められ通訳活動のきっかけを作られます。その竹中さんの人柄について詳しくは「兵庫手話通訳の足跡」をぜひ買って読んでください。この竹中さんご夫婦の協力もあって、これまで役員会を開く場がなかなかなくて開けなかった、場所を転々と変えていたが、竹中さんのお家が幸い便利な所で、元町駅西口を出て3分ぐらいの所に家があり、もともと喫茶店を経営されていた時にもろうあ者が沢山利用されていたそうです。その喫茶店を潰してろうあ者のため、役員会が開けるような場所にとまって改装されて、その場所を提供する決意をされました。



そういう女性であり、通訳を担いながら聞こえない人たちのために一生懸命活動されてきました。そういうやり方でこれまで続けてこられた方です。そのご主人もその後会長をされることもありました。ご夫婦のご援助もあって場所の確保ができ役員の人たちが集まって相談できる場所が設けられました。

次に毎月、毎月会員の人たちが集まる場所探しも大変でしたが、その場所も「諏訪山会館」をずっと借りれるようにと交渉され、実現してからはその場所を借りて総会を開いたり、ろうあ者が

集まって楽しめる場所であったりして、沢山の人たちが集える場所になりました。

私が4歳か5歳頃のときのことですが、何か大きな集会があったとき、竹中さん1人が「通訳」他は誰もいません。走りまわっておられた。大変忙しくされていたわけです。その時、私の父が通訳を頼む女性は3人決まっています。その時、その時に選んでいるようですが、3人とも口話が達者な方です。聞こえませんがそのうちの1人を連れて集まっている所に役所の人を呼んで父は話し始めます。女性は父の話を読み取って口話で役所の人に伝えます。役所の方はそれを聞いてメモ書きしたものを父に渡します。父はそれを見て、また話し始めます。それをまた口話で伝えると、またメモ書きしたものが父に渡されるといったようなやり方をしていました。「通訳」は聞こえない女性・男性がやっている様子を見てきました。

だから聞こえない人は通訳ができない、ではなくて聞こえない人でも通訳はきちんとやれます。今見てみますと触手話などはろうあの人たちがされていますし、大勢おられますよね。同じように聞こえない人たちの中には通訳と触手話を兼ねながらやれるという状態ではないでしょうか。私は4歳か5歳の頃からそういう状態を見てきました。私が幼少の頃、広畑会長はどんな方だったかといいますが、口話の達者な方で大変厳しい方でした。話し方が厳しくどうしてなんだろうと、今思えばローアクラブを結成した頃、敗戦を迎えた後、世の中は混乱している時代です。一般の元気な人でも暮らしが大変でしたよね。障害を持っている人たちはさらに大変だっただろうと思います。

だから厳しく、厳しく教えられていたのでしょう。そういうイメージがあり、広畑会長さんは私にとってはとても怖い人でした。それぐらい厳しく、厳しく指導されていました。その様子を見てきた私は、私と父の間での通訳経験について今日はお話できませんが、通訳していて父のやり方のテクニックはどうも広畑さんを真似て、真似てしていたのではないのか、広畑さんから厳しくいろいろ教わり、また参考にしながらテクニックを学んだのだらうと思います。それぐらい広畑会長さんはとても怖かったというか、でも本当のところは優しい人だったと思う。言い方は厳しいけれ

どもキチンと教えられていた人だと私は思っています。時間が迫ってきました。

私の両親はろうあ者でした。ですから、聞こえる子どもが生まれた時言葉を教えられるかどうか不安であったらと思います。だから竹中さんのお宅は元町にあり、私はいつも父に連れられて行きます。それはどうしてかと言いますと、竹中さんの家族の中に2人のお嬢さんがいて上のお嬢さんが私と同級ということもあったと思いますが、家族構成はお婆さんがいてご主人だけが聞こえなくてあと4人は健聴者という家族のところによく私は連れて行かれました。それは、両親として子どもに言葉を獲得させることが必要だと思ったのかも知れませんがよく連れていかれたことを記憶しています。竹中さんのお宅は2階建てで子ども部屋は2階にありいつも一緒に遊んだり泊まったりの経験があります。

昭和24年先程お話ししたように役員が改選されてからろうあ者は竹中さんのお宅をいつも利用していましたが、やはり自分達の建物がほしい、自分たちの事務所がほしいという強い思いがあって広畑会長が号令を発せられました。それは自分たちの力で事務所を設けようと運動が始まりました。毎月集まった会員から100円ずつ集めてお金を蓄え必要な時に出せるように準備をし、集まる度に何度も会員から100円ずつ集めるとか、レクレーションをした時の剰余金を貯めるなどお金を作り始めました。

その頃「神戸ろう学校PTA」があり共同募金の申請をして助成を受けていました。「神戸ローアクラブ」も共同募金に申請をしますが、共同募金の側から言われたことは同じ内容でろうあ者のための助成金について二つとも支援することはできないのでどちらか一つにまとめてほしいと言われました。「ローアクラブ」と「PTA」が集まって相談を始めました。「PTA」の会長をされていたのが古家さんです。ふるやさんと読むのかふるいえさんという人もいらっしゃいます。私の記憶ではふるやさんというお名前だったと思います。息子さんがろうの方で今日は来られているのかな？と思いましたが、残念ながら欠席されています。

お父さんは元々国鉄の仕事をされていました。

退職された後も国鉄関係のお仕事をされていました。その方が会長をしていた時に「PTA」と「神戸ローアクラブ」が集まって相談をされ、お金をどうやって集めればよいのかについて話し合い「PTA」側からお金を拠出してよいという形になりました。そして「神戸ローアクラブ」のお金をさらに貯めることができました。

当時神戸の中心街はどこかと言えば、今は三ノ宮あたりが中心ですよね。神戸と言えば三ノ宮。でも、以前の昭和24年、25年の頃は新開地が中心でした。交通手段をみたときに、昭和24年、25年辺り当時は、国鉄の兵庫駅があります。山陽電車は、兵庫駅まで、神戸市電の終点も兵庫駅でした。ですから、神戸の中心は兵庫駅辺りだったんです。三ノ宮ではなかったんですね。たまたま古家さんが国鉄と相談して国鉄の高架下をつかってもいいという話をもってきてくれました。

その時ろうあ者たちはどの辺りがいいと思われたかわかりますか。相談された結果三ノ宮駅がいいと返事をしたんですねえ。そして三ノ宮へ下見に行こうということになります。私は子どもの頃ですが覚えています。父に連れられて三ノ宮の南側、高架下東に5分？、3分ぐらいのところですよ。歩いて行き高架下のこの辺りがいいということで伝えましたが、国鉄側から認められず、仕方なく次は西の元町駅、ここは竹中さん夫婦の家に近いし便利なので元町駅のここがいいと伝えると、またダメと言われてしまいます。結局、三ノ宮、元町、神戸は駄目であると言われてしまい、高架下をお借りする話は当分たち切れになりました。

でも、その後古家さんのご尽力のお陰でやっと国鉄側から兵庫駅の高架下なら貸してもいいと言われました。兵庫駅の高架下といっても遠くでは困るのでどの辺りか見に行こうと何人かの人たちで見に行きます。行ってみると便利な所です。駅から歩いて5分ぐらいのところですよ。ここなら貸してもいいということで決心してお借りすることになりました。時間の関係で飛ばしていきます。やっと兵庫駅の高架下をお借りするようになりましたが、元々は狭い所で畳み6畳ぐらいの狭い場所でした。その後お金を貯めては増築していくんですね。3回ぐらい増築し広げていきます。でも最初は6畳一間の狭い場所でした。

国鉄から場所を借りていますので、他の人にまた貸しをすることは駄目なんです。でもお金に困っていたので借りている場所に車を止められるように作りかえて他の人に駐車場として利用してもらい駐車料をとるという方法をしばらくやりますが、その後聞こえない女性たちの和裁などを習うための場所が必要となり、貸していた駐車場を潰して作り直し、女性たちが和裁を習う場所、それから寝泊まりが出来暮らせる場所に改装することになりますが、それまでの間、駐車場として貸し、お金をもらってやり繰りしながら改装するためのお金を貯めていきます。資金が貯まっていくと部屋を増築し、貯まったら増築していくこととなりますが、最終的には昭和32年、今のような「ろうあハウス」の形にできあがります。

昭和27年に「神戸ローアクラブ」という看板、入り口のところに看板が掲げられていましたが、昭和27年に正式に名称を変更し、「神戸ろうあ協会」となりました。名称変更の頃から増築工事が始まっていくわけですね。最終的に新しい「ろうあハウス」という形になって、私が覚えているのは2階は畳ではなくて板の間なんです。その板の間に舞台も作られました。全て聞こえない人たちの手作りです。聞こえない人たちは手先が器用ですよ、手作りで舞台が作られ、また幕も作られていました。大変立派な幕でした。その場所に私はよく連れて行ってもらいました。1月3日、必ず1月3日に新年大会が開かれます。1月3日です。今だったら考えられませんか、1月3日、みなさんは家でのおんぼり、ゆったりされてると思いますが、当時は1月3日の新年大会に集まってこられた聞こえない人たちは100人を超える人たちが2階のろうあハウスに集ってこられます。

いろいろ楽しいお芝居などもされます。私が楽しみで連れて行ってもらうのには2つの理由があります。1つは、きんつば白で包まれた四角いきんつば、これが1月3日の新年大会のときに必ず一人2つ、箱入りで配られます。今考えるとこの1月3日、普通お店は閉まっていますよね。でも1月3日必ずきんつばを来られた方みんなに配られます。どうやって取り寄せたのか不思議です。

私はよくわかりません。でもとにかく1月3日は楽しい、きんつばがもらえるから、食べて美味

しい…2つ目は、私のような子どもがいない私1人ぐらいです。ですからお年玉がもらえるので嬉しくて、嫌がらずにむしろ喜んで積極的について行ったように思います。ですから1月3日は決まって「ろうあハウス」へ一緒について行き、きんつばを食べてお年玉をもらえる嬉しさもあっていつも連れて行ってもらいました。



次に聞こえない人たちが凄いなあと思ったのは、即興でお芝居ができることです。前もって準備してお芝居を披露するのではなくて、その場であなたやりなさいと伝え、いきなり指名された人は、えっ、といいながら舞台上がりお芝居が披露できるんですね。凄いなあ、普通では考えられませんが、聞こえない人は即興でお芝居を披露することができる。羨ましいなあと思いました。

また楽しい行事等についても聞こえない人たちの持っているテクニックで披露できるととても楽しい場所だったと思う、「ろうあハウス」の楽しい思い出は沢山あります。時間の関係で全てお話しすることができませんが…

私の父は昭和32年、42歳で亡くなりました。その後、私は「ろうあハウス」とろうあ者集団の中へ行くことはなくなりました。私は母との二人暮らしの生活が始まり、ろうあ者集団との関わりは父が亡くなって以降、疎遠になってしまう状態が続くこととなります。7時50分までと書かれたものがきています。2～3分では終わりませんが、とりあえず、「ろうあハウス」といえば、聞こえない方々の手作りや苦しい想いがあったり、また逆に楽しい想いが詰まっているといったいろいろな想いが一杯ある「ろうあハウス」に、私は小さいときから連れて行ってもらって見てきた

「ろうあハウス」はとても楽しい場所、やはり聞こえない人たち一人ひとりの力で作られた建物だから喜びも大きかったと思います。

そういう場所に私も行かせてもらい経験した内

容について少しみなさんにお話しすることができたということで今日の私の講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)



JR高架下にある「神戸ろうあハウス」

現在は
社団法人 兵庫県聴覚障害者協会
就労継続支援B型事業所
共同作業所 神戸ろうあハウス
になっている。

〒652-0897 兵庫県神戸市兵庫区駅南通
5丁目4 西高架下16号

